氣仙高田の武日長者、姉は旅の空に世を早うして、徒らに姉羽の松の名を留め、妹は采女となつて京に上つたと謂ふの類、今は悉く物の哀れを聽くの人の想像に讓つて、實際其樣な出來事があつても無くても、構はぬといふ境まで進んでは來たけれども、最初に何が目的で斯ういふ物語を聞きもし語りもすることになつたかと言へば、やはり亦餘うに空虛なる我土地の過去に、曾て充ち滿ちて居た何物かを見出さうとする念慮からで、それ故にこそ最も神靈に親しく、隱れた世界と交通することの出來る人のみが、常に備はれて仲次の任務には服したのであつた。

盲目の力

故人が我々の夢に見える如く、又物語の中に現れて泣き歎いたことは、淨瑠璃のやうな近世の產物にも、なほ多くの名殘を留めて居る。文藝が宗敎の領分から全然獨立して後も、歌謠は到底平靜たる叙述のみを以て、喚び戻された古人の生活を客觀することを得なかつた。情の高潮に達した際には、主人公は必ず歌を詠むことになつて居る。之を聽く者の感動は必ずしも其詞の巧拙によらず、寧ろその自ら語るの聲に由つて、現前に相對するの思を抱くからであつた。イタコ又はモリコと稱する東化の巫女たちは、敎へられずして早くより此法則あることを知つて居た。故に一方には祈禱の辭、若くは遠ざからんとする靈魂を招くの詞を唱へつゝ、他の一方には一見これとは關係なき歌物語を以て、神を人界に悠遊せしめ、若くは人をして神の國を愛せしむるの手段に供して居るのである。

之に比べるとボサマの方は、同じ盲目でも早くから信仰を離れて、物語に專らなる者が多くなつたが、それでも自ら一人稱を用ゐて、私が見た斯う言つたと、語つて居た時代は永かつたのであらう。さうして義經記に於ては義經を招き、或

は辨慶龜井をして語らしめたのでは、中途で死ぬ故に事件の全體に亙ることが不便であつた。從つて比較的重要ならぬ常陸坊海尊を煩はして、顚末を叙せしめたのであるまいか。若しさうだとすれば海尊は死せず、若くは長命してまだ居るといふ俗傳は、最も容易に行はれ得たので、しかもその海尊が弘く此地方の信仰の一中心を爲したのは、座頭の職分の九州同樣に、本來亦宗教的なりしことを暗示するのみならず、更に海尊の信仰が此徒を介して、高館口碑の成長に參與して居たことを推測せしめ得るのである。

此點は平家物語と座頭との關係も同じことで、文字の記錄を離れて考へると、平家と義經記と起原何れが古きといふ問題は、まだ〳〵決定の時期には來て居ない。徒然草其他の京都人の記錄には、平家は文人某が作つて盲人に歌はせたとなつて居るが、それは此物語の何れの部分も、すべて京都に起つた筈といふ前提から來て居る。成程京人でなければ知らぬ話も多いが、同時に又公卿衆などなら知るまいと、認めてよい部分も少なからず、しかもどうしてそんな事を琵琶の曲にかけるに至つたかの説明は、却つて後者に在つてのみ可能である。

合戰の物語の古戰場から起るは自然である。戰の跡には人怖れて近づかず、五十年も百年も荒れて居て、心を動かすべき光景であつたらう。從つて亡靈を信ずる人々には、數々の不思議が現れずには居なかつたと思ふ。それを問ひ弔ふ人の志に、話を知りたがる好奇心も加はつて、何かと言へば村に居る巫女術者が、其昔を說く機會は多かつた筈である。沖繩などでは北山の城蹟は、今以て悲しい荒墟であるが、國頭全郡の舊姓にしてユタの言に聽き、北山王を以て一旦忘れたる其家の遠祖と信じ、年々來つて香火を捧げる者が、既に數萬人に及んで居る。支那でも南宋の朝廷覆沒して後に、陶眞と稱して琵琶を彈ずる盲人の、舊史を說く

者が多く出たと謂つて居る。瀬戸内海殊に壇の浦の周圍なども、恐らくは亦平家座頭の發祥の地であつたらうと思ふ。

盲人は殊に目に見えぬものゝ音響を傳へるに、適して居たのでは無かつたか。小泉八雲氏の怪談の中に、耳切法市なる者が長門の阿彌陀寺に在つて、平家の人人の亡魂に招かれ、何も知らずに其物語を語つたといふ話がある。諸國に分布した逃竄說話の一つで、多くは陀羅尼の功德に由り、耳だけ切取られて助かつたことになつて居るが。山の神や路の神其他の怖ろしい神が、盲人の目が見えぬに乘じて近々と現れ來り、歌曲を所望したといふ點は何れも同じである。恐らくは曾て神と人との間に立つ役に、特に選定して盲目を用ゐた名殘だらう。平家の方では惡七兵衞景清の地位が、やゝ義經記の海尊と類似し、其交涉は物語の內外に及んで居る。彼が眼玉を拔き棄てゝ日向に行き、神に仕へて居たと稱して色々の口碑をなし、一方には座頭の給田がもと日向に在つたと謂つて居る類の傳說は、誤解若くは假構にせよ、何か隱れたる事情が無くては、唐突に發生しやうは無かつたのである。

但し今更其樣な事情は、尋ねて見るにも及ばぬか知らぬが、昔の交通の容易で無つた時代に、何の因緣が斯ばかり幽かなる農民の夢を、成長させ變化させ又遠くへ運んだかといふことは、一度は考へて置いてもよいのである。曾我兄弟の仇討の物語が、もと富士山下の荒寥たる田舍を出て、中國四國の山の奧にはいつて居る場合に、必ず虎少將が尼となつて廻國し、若くは鬼王團三郎の來て隱れたといふが如き、本文以外の事實を伴うて居るやうに、義經記の流傳にも亦早くから、常陸坊とか鬼三太とかの、書物を無視した活動があつたのである。文學の都鄙優劣が强く現れるやうになつてから、たまゝ相手の武器を借りて爭はうとした者

は、忽ち清悅物語の如く敗北したが、さういふ世の進みには頓着せぬ人々が、古い方式を守つて居た場合には、何等かの形を以て兎に角に、土地に元からあつた物を保存して居のである。

虎少將の廻國といふことは、要するに曾我を說いた人々の行脚を意味するらしい。義經記の方で之に似た者は靜御前、是も諸國の田舍に來て、菴に住み又は石を立てゝ居る。吉野記吉野文などといふ舊記のことが、東北にも傳へられるのは、或は此と關係があるのかも知れぬ。小野小町和泉式部といふ類の上藷までが、東西の諸國に同じ一つの物語の跡を止めて居るなども、之を模倣又は妄說と見る必要は少しも無い。要するに是も旅の語り部と、物語の主人公とが混同した結果であつて、やがて又日本民間の說話が、久しく一人稱形式を以て述べられて居た證據である。

（大正十五年十月十一月、中央公論）

同じ著者の近年の業蹟

大岡山書店發行

海南小記

海と海岸に働く日本人の生活、其間に成長した島の文化の考察である。九州東岸から沖縄群島までの旅行が學問の新機縁を促したことは「雪國の春」も同じである。炭燒長者の物語、竈神の信仰、春の神の往來など、共通の題目は少なくない。

山の人生

郷土研究社刊行

神隠しの不思議と、日本の天然信仰の根原を説かうとした新しい試みである。「雪國の春」の末の方に詳述した長命な旅行者と歴史との關係は、少しく形を換へて現代まで續いて居る事を、豐富なる實例を以て論證したものが本書である。

祭禮と世間

郷土研究社刊行

世間は祭禮を誤解しつゝ、今尚その隠れたる力に由つて動かされて居る。讀書人の無智が社會に不幸なる斷層を作ることを防がうとすれば、特に事實に就いて學ばなければならぬ。その學問だけは輸入することが出來ぬ。乃ち將來の國學として是より大に起るべきものは、前代平民の精神生活の研究であるといふことを説いて居る。「雪國の春」の天地には、陸前鰐竈のザットナの如き、珍しい題目がまだ幾つと無く殘されて居たのである。

昭和三年二月一日印刷
昭和三年二月十日發行

雪國の春奥付

定價二圓五十錢

著作權所有

著者　柳田國男

發行者　東京市麹町區上六番町五番地　岡茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十八番地　白井赫太郎

印刷所　興山舎製版　秋本製本　精文堂印刷

發兌　東京市麹町區上六番地　岡書院

電話九段二七七五番
振替東京六七六一九番

昭和六年四月廿六日

小牧安繁

22 0 . 6

圖書院藏印